

# 国絵図にみる東北日本の環境変化

岩 鼻 通 明

(山形大学教養部地理学研究室)

## 1 はじめに

日本近世の幕藩体制の下で、各国ごとに絵図が作成され、徳川幕府に提出されたものが、いわゆる江戸幕府撰国絵図である。これまでの研究成果によれば、慶長・寛永・正保・元禄・天保の5回の収納があったとされる。

このように国絵図の作成は5回中4回が幕府成立当初の百年間に集中しており、幕藩体制を確固たるものにするには不可欠の事業であったと考えられるが、幕末期の天保年間にも、いわゆる天保の改革の先駆けとなるものとして国絵図の作成が行われた。

天保期に至るまで正保期からは二百年近く、元禄期からでも百五十年近く経過しており、その間にはさまざまな環境の変化が生じていることが想定される。

そこで、現在に伝えられている国絵図を比較考察することから、近世期における環境変化を歴史地理学的方法によって把握を試みることに本研究の目的となる。

## 2 東北地方における国絵図の所在状況

国絵図研究は、歴史地理学の分野では川村博忠氏、歴史学では東京大学史料編纂所を中心に調査研究が進められてきたが<sup>(1)</sup>、近年、各地で調査研究が活性化しつつある<sup>(2)</sup>。

博物館・文書館などでの国絵図の公開・展示や県史・市町村史類などに収録される機会はかなり増加したものの、地方史研究においては、すべての地域で十分な調査研究が行われているとはいいがたい面もある。

東北地方においても、国絵図の伝来そのものについての調査が従来は不十分であり、歴史地理学ないし地方史研究に十分活用されてはいない状況にあった。

したがって、本研究はまず東北各地に伝来する国絵図関係史料の所在の確認から出発した。以下にこの三年間の調査によって確認された国絵図類を紹介する。

### ・出羽国

出羽国絵図については、筑波大学の小野寺淳氏が近々詳細な研究成果を発表予定のため、本稿では、その所在を簡単に述べるにとどめたい。

まず、正保の出羽国絵図の写本と考えられるものが、山形県鶴岡市の致道博物

館（写真1）および秋田県立公文書館（県立秋田図書館旧蔵）に伝来する。この秋田県立公文書館の「出羽一国御絵図」は、略図が『山形県史 資料編18 近世史料3』および『角川日本地名大辞典 5 秋田県』と『同 6 山形県』に掲載されている。

致道博物館には正保2年（1645）頃の作成とされる「正保庄内絵図」（山形県酒田市の本間美術館に寛政3年（1791）の写本があり、その写真が『山形県史 資料編17 近世史料2』に掲載されている）も伝来し、おそらくは「出羽一国御絵図」作成の元絵図になったものと思われる。

山形大学附属博物館所蔵の元禄13年（1700）作成の「正保年中置賜郡絵図」も同様のものと考えられ、元禄国絵図作成に際して、幕府から貸与された正保国絵図を模写したものかと思われる。

そして、元禄の出羽国絵図は、川村博忠氏によれば秋田藩・新庄藩・米沢藩・庄内藩・山形藩の絵図元に分けてそれぞれ作成され、あまりに巨大なため、おそらく出羽国を一国にまとめた絵図は作成されなかったようである。この元禄国絵図については、下絵図を含む数枚の秋田藩領絵図が秋田県立公文書館（秋田県庁旧蔵）に伝来する。その詳細は小野寺淳氏の報告を待ちたい。

また、新庄市立図書館所蔵の「新庄藩領内絵図」（『山形県史 資料編18 近世史料3』に写真掲載）は、元禄14年（1701）に作成されたもので、おそら

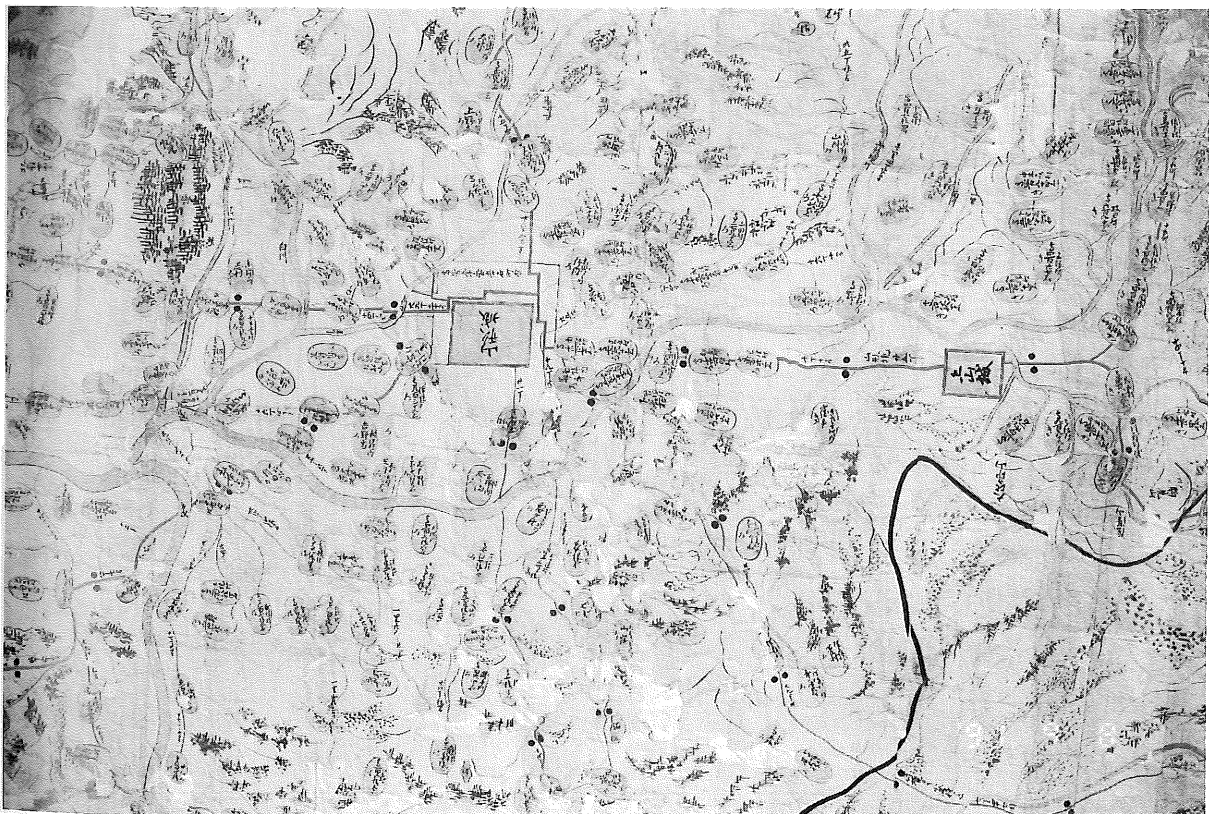


写真1 出羽一国大絵図（致道博物館所蔵）

く幕府に献上した元禄国絵図の写本と思われる。

また、市立米沢図書館所蔵の上杉文書には、上杉藩領であった置賜郡絵図などの国絵図類が数多く伝来し、上杉藩の絵図師であった岩瀬家文書にも出羽国のみならず仙台領などの周辺地域の絵図が数多く含まれており、川村博忠氏の『近世絵図と測量術』、および浅倉有子氏の「御用絵師と絵図編纂」（『絵図でみる城下町米沢』米沢市立上杉博物館特別展図録、1992年10月、所収）がこれらの絵図に言及している。

なお、天保の国絵図の写本は秋田・山形県内には伝来していないようで、幕府作成の正本が国立公文書館の内閣文庫に所蔵されているが、国重要文化財に指定されているために閲覧が困難であり、出羽国絵図については写真撮影もいまだ行われていない。

同じく国立公文書館内閣文庫所蔵の「出羽国村山郡之図」（『山形県史 資料編18 近世史料3』に写真掲載）は幕末の山形藩水野氏時代の作成であり、天保国絵図を参考にしたものと考えられる。文久3年（1863）作成の「庄内二郡絵図」（鶴岡市郷土資料館所蔵）も同様のものと考えられる。

#### ・陸奥国

陸奥国は旧六十六ヶ国中最大の面積を有するため、どうやら正保段階から陸奥国を一国にまとめた国絵図は作成されなかったようである。縮尺が一里六寸（21,600分の1）に統一された国絵図の大きさは出羽国の場合でも東西が5m、南北が10mを越える大きな絵図になり、もし現在の青森・岩手・宮城・福島県をカバーする陸奥国の一国国絵図を作成しようとすれば、それをはるかに上回る巨大な絵図になるため、幕府も作成を断念したのではなかろうか。

また、陸奥国および出羽国においては、慶長と寛永の国絵図についてはほとんど手掛かりが得られなかった。

さて、川村博忠氏によれば、元禄の陸奥国絵図は津軽藩、南部藩、仙台藩、会津藩、福島藩、磐城・棚倉・相馬藩、白河・三春・二本松藩、に絵図元を分割してそれぞれ作成されたが、各藩領ごとに国絵図の写本とみられる絵図が各地に伝来するので、それらを以下に紹介したい。

まず、津軽領絵図については、青森県立郷土館所蔵（八木橋文庫旧蔵）の「陸奥国津軽郡之絵図」があげられる（写真2）。この絵図の端裏書には「正保二乙酉年十二月廿八日差上御公儀候控之写也 貞享二乙丑年三月廿六日」とあり、正保2年（1645）に作成した国絵図の写しで貞享2年（1685）に作成されたことが明らかである。おそらくは、元禄国絵図作成の準備作業として、正保国絵図を模写したものであろう。なお、『角川日本地名大辞典 2 青森県』にこの絵図の略図が掲載されているが、郷帳と合わせ解説を付した写真版が同館より近々発行予定とのことである。

また、弘前市立図書館所蔵の津軽家文書には多くの絵図類が含まれているが（『津軽家文書総目録』弘前市立図書館、1984年）、この中の「御郡中絵図」

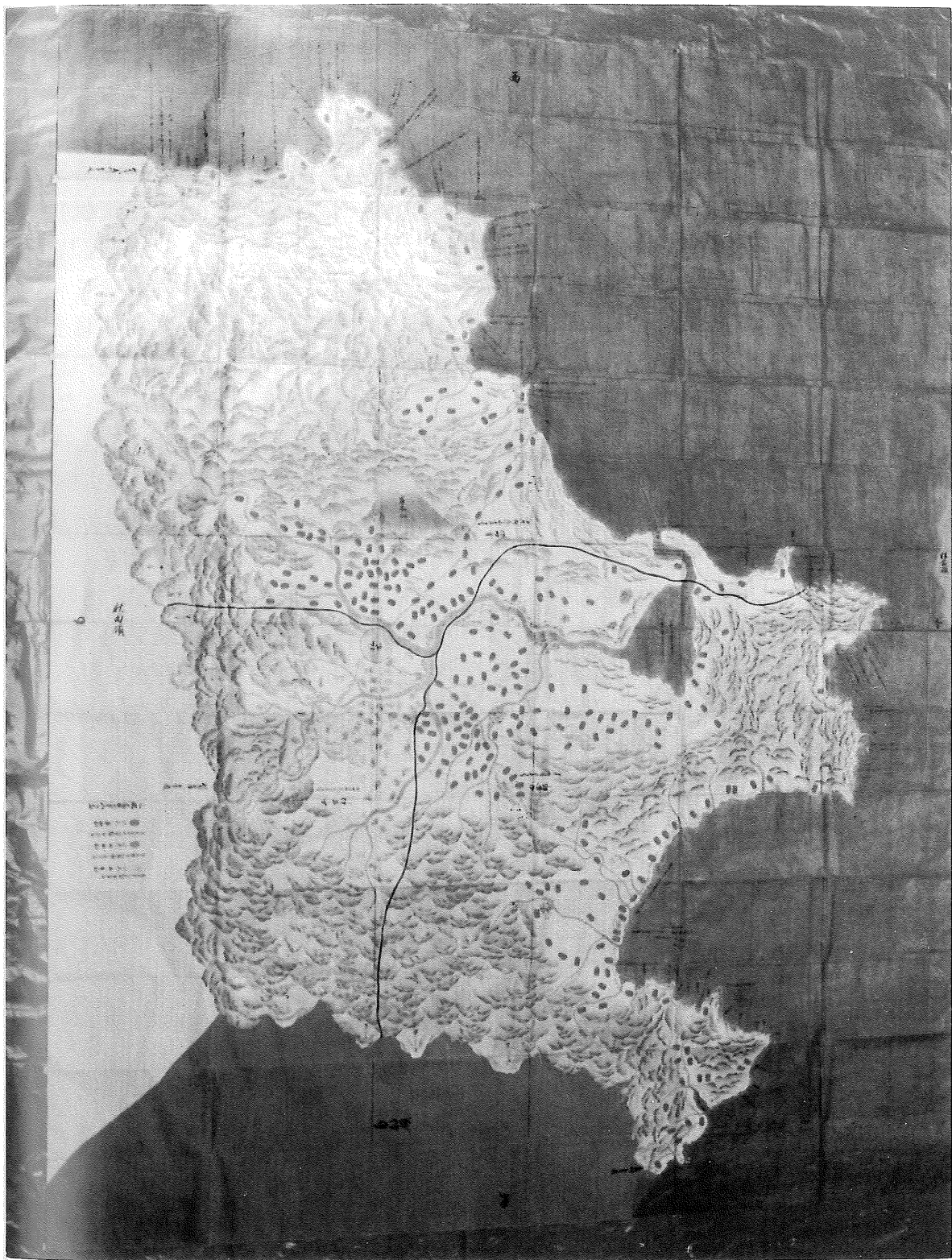


写真 2 陸奥国津軽郡之絵図（青森県立郷土館所蔵）

は慶安年中の写しとされ、「津軽領画図」も石高は正保郷帳に合致することから<sup>(3)</sup>、いずれも正保国絵図の写本かと思われる。

この「津軽領画図」のトレース図版が長尾角左衛門『岩木川物語』青森県河川協会、1965年（国書刊行会より復刻）、に掲載されており、また『津軽家文書総目録』の註によれば、「安永8年（1779）於江戸表日本諸国之図御屋舗江売払ニ来候ニ付右之内御国之絵図計写取候図也」「春田丹波入御覧候日本絵図之内写」とあり、写本の成立の経緯が知られる。

さらに、津軽家文書には「陸奥国津軽領絵図」の写しが三点存在するが、これらはいずれも8舗から成っており、各地に同様の形態で伝来する天保国絵図の写本とみられる（幕府から諸藩に渡された元禄国絵図の写しの切絵図に各藩で修正をほどこして幕府に提出した絵図の写本）。

なお、中津軽郡岩木町にある高照神社には、津軽藩の山鹿流兵学師範を勤めた貴田家から奉納された三百点余りの絵図類があり、その中には諸国の国絵図や城絵図が大量に含まれている<sup>(4)</sup>。その多くは山鹿素行と同門であった貴田元親の作成であり、时期的にはおそらく正保の国絵図と城絵図が完成してまもなくの頃にこれらの写本が作成されたと想定される。近世後期には、版本の国絵図や様々な国絵図の写本が数多く作成されるようになるものの、正保国絵図の成立まもない時期の写本の事例として貴重な史料群であると評価されよう。このような各藩に伝わる自国以外の国絵図類にも今後は注目する必要があるだろう。

次に、南部領絵図については、盛岡市中央公民館所蔵の南部家文書に多くの絵図類が伝来する（『郷土史料目録』盛岡市中央公民館、1982年）。1993年9月の調査時には、「奥州之内南部領惣絵図」（目録特28.8-1）、「南部領惣絵図」（特28.8-2）、「南部領内総絵図」（特28.8-3）、「南部領総絵図」（特28.8-4）、「領内図」（特28.8-6）を拝見させていただいた。

これらの国絵図の詳細は次章で述べるが、「領内図」には正保二年御絵図との裏書がみられ、正保および元禄の国絵図の写本かと思われる。

なお、南部家文書には元禄12年（1699）の南部領内総図、岩手県立図書館には天保10年（1839）写の御領分絵図があるとされ<sup>(5)</sup>、これらはそれぞれ元禄と天保の国絵図の写本の可能性があらうか。

さて、南部領絵図の作成過程については、南部家文書の盛岡藩雑書から詳しい経緯をうかがうことができる。

まず、正保の国絵図作成に関しては、寛永21年（1644）8月3日に南部領諸城絵図に関する記載がみられ、国絵図とともに幕府に提出された正保城絵図の作成に関わるものである。また、同年9月6日には領内検地帳を江戸へ送る旨の記載がみられ、国絵図と平行して作成された郷帳に関わる記録となっている。

しかし、国絵図そのものについての記載はさほど多くはなく、正保2年（1645）2月1日に浜浦御絵図作成のため見廻、同年6月14日に秋田藩より境絵図に付き使者来着、同年6月23日に境目絵図に付き久保田より飛脚、同年7月5日に久保田との鹿角境絵図、同年7月16日に御家中郡分境目改に関する記



載がある程度で、秋田藩領との境絵図の作成についての記載が目立つ。

そして、完成した国絵図の幕府への提出については、慶安3年（1650）1月12日に以下のような記載がみられる<sup>(6)</sup>。

「一 御領分中之絵図一通、盛岡御城之絵図一通、所々浦番所之絵図一通、右三通之絵図 御公儀へ御上被成候扣今日出来、御前へ上、何も箱一ニ入、田代半右衛門渡」

それに対して、元禄の国絵図作成に関しては、かなり詳細な記載がみられる。

まず、元禄10年（1697）4月26日に幕府の評定所より諸藩の江戸御留守居へ国絵図作成についての覚書が渡され、翌日付けの飛脚で盛岡にもたらされた内容を以下に紹介しよう<sup>(7)</sup>。

「 覚

- 一 先年之絵図何もへ借渡可申候事
- 一 新絵図分割等其外、古絵図之通可被仕候、但古来と川筋違候所、或新川・新道・新村又ハ新池沼等在之ハ、被相改絵図ニ可被仕事
- 一 国々御料・私領并寺社領、正保二年酉ノ年以来地形ニ交り候所有之候哉、御代官・領主又ハ寺社方へ被相尋、交儀無之由申分は絵図被取候に不及、古絵図之通可被仕候、尤交所在之分ハ、其村計絵図を被取本絵図可被直事

附、御料・私領又ハ寺社領之分、銘々所付書付可相渡候間、其上古絵図ニ在之村々ニて被相改、様子被尋儀は其所々へ直ニ可被相尋候

- 一 正保二年以来論所等在之、裁相済候所は古絵図と違候場所も可有之候間、銘々御代官・領主又ハ寺社方へ被相尋、左様之所も在之は、新絵図可被改之、但古論所之儀、国境・郡境之外之出入は不及吟味事
- 一 国境・郡境只分論所在之、内証ニて不済儀は、公義（儀）へ訴、請許済候様被申達、裁許済候以後、其所絵図ニ可被記事

附、只今及浄（諍）論 公義（儀）へ出候場所も、出入相済候以後、絵図可被記事

- 一 国境・郡境之外之出入は裁許無構、絵図仕立可被申事
- 一 借渡候古絵図、隣国之絵図被仕候と申合、国絵図之上ニて改、相違在之所は此方へ可被相窺候事」

この七ヶ条は川村博忠氏によれば<sup>(8)</sup>、幕府が示した国絵図改訂の基本方針と改訂の留意事項を指示したものであった。それに続いて、以下の覚がある。

「 覚

- 一 今度国絵図御改ニ付、其国々絵図請取之方より万事承候儀無相違様ニ仕、絵図被致候方々之差図次第に仕候様、可被相達事
- 一 大身・小身によらず、国・郡・村銘々書付、壹万石以上并寺社領は井上大和守、壹万石以下其外諸御簾（旗）本之分は安藤筑後守・松平美濃守方へむ（も）より次第、并組支配在之面々ハ其頭之支配より書付持候て、差出候様可被相触事

一 御書物蔵に在之国絵図、当分借渡一覽之以後、返候様可被申渡事」  
この三ヶ条も川村博忠氏によれば、各国の絵図元より、国内の他領主へ伝達すべき事項とのことである。それに、以下の覚が続く。

「 知行所覚

一 何国、何郡之内

何村 何村 何村

月日 誰

右之通認、知行高は面々絵図被仕候国外之領知計如此入申候

縦は二ヶ国在之人は二通ニ認、来六月中井上大和守方へ可被差出候、但其時節迄ニ書付難調子細在之は、其段可被相断候、已上」

この覚も川村博忠氏によれば、全国一斉の領主別郡村書付の記載要領として指示されたものとのことである。そして、以下の記載が続く。

「 御口上ニて被 仰渡事

一 国絵図之書付被相渡候事

一 古絵図可被借下候、御書物蔵役人へ被 仰付候、請取写候て早々返上可被申候、右之絵図請取候日限ハ、追て可申渡候

一 絵図伺之儀は古絵図相渡候已後、窺可被申候

一 今日被 仰渡候御届ニハ不遅事

御列座

井上大和守様

安藤筑後守様

松平美濃守様

四月廿五日」

この記録は口頭で申し述べられたことを筆記したものだが、藩記録に残されている珍しい事例といえ、上述の覚の確認がほとんどではあるが、元禄国絵図の作成過程を知る上で貴重な史料であろう。そして、最後に以下の覚が記載されている。

「 覚

松平肥後守様（会津藩）

松平陸奥守様（仙台藩）

南部信濃守様（南部藩）

津軽越中守様（津軽藩）

右之御方様国絵図御領分切、一枚絵図か、何之被 仰渡も無御座候  
清絵図

松平大和守様（白河藩）

秋田信濃守様（三春藩）

絵図一枚

丹羽左京大夫様（二本松藩）

堀田伊豆守様（福島藩）

右は松平大和守様ニて、一枚絵図御仕立候筈

清絵図

内藤能登守様（磐城藩）

内藤紀伊守様（棚倉藩）

絵図一枚

相馬弾正少弼様（相馬藩）

右は内藤能登守様ニて、一枚絵図被仕立候筈

四月廿五日」 （ ）内は筆者注

この覚は、国絵図作成の分担で、前述のように陸奥国はあまりにも広大なため、幕府に提出する絵図も分割作成となつたのである。ただし、実際の提出段階では、前述のように福島藩のみは単独提出に変更されている。

さて、この後も盛岡藩雑書には国絵図関係の記録が点在するが、その引用は煩瑣になるため、その概要を要約して以下に紹介したい<sup>(9)</sup>。

まず、元禄10年（1697）7月20日に、幕府から拝借した絵図の写しに関する記載が登場する。これはおそらく元禄国絵図作成の準備段階として正保の国絵図（先の覚にみえる「古絵図」）の写本を作成したものと解される。

次いで、同年7月22日には国絵図作成の絵師の増員、8月17日には八戸より絵図役人到着の記事、8月22日には八戸藩領郷村帳請取の記事、8月23日には八戸絵図役人帰国の記事がみえる。

そして、8月27日には、絵図ができたので、江戸で清書するために4人の絵師を派遣する旨の記載がみられ、8月29日には、郷村帳と御本高帳の下書もできたので飛脚で送る旨の記載がみえ、9月2日と9月7日には派遣する役人に金子を与える旨の記載がみえ、9月13日にはいよいよ江戸へ向けて出発する旨の記載がみえる。

このように、以上の史料から、わずか半年間で南部領国絵図の作成が急ピッチで進められた様子をつぶさに知ることができる。

さて、南部藩では、仙台藩との国境問題が元禄国絵図作成時の大きな課題となっており、南部家文書にも元禄14年（1701）の仙台領境絵図、津軽領境絵図、秋田領境絵図などが大量に残されている。

ただし、残念ながら、この部分の盛岡藩雑書はまだ活字化されていないが、近々発行予定とのことなので、詳しい検討は今後の課題としたい。

なお、国立公文書館所蔵の南部領天保国絵図の正本は幸い写真撮影が行われているので、ここに三分割したものを掲載する（写真3）。

次いで、仙台藩領の絵図については、正保年間とされる「仙台領国絵図」が仙台市立博物館に所蔵されており、同館展示室の壁面には、この模写が飾られている。

そして、宮城県図書館所蔵の伊達文庫には仙台藩旧蔵の数多くの絵図類が残されている（『伊達文庫目録』宮城県図書館、1987年）。この中に含まれる国絵図類および元禄国絵図作成時の「御国絵図記録 9巻」と「御国絵図入日記 1巻」（元禄15年（1702）の写本）については、既に佐藤宏一氏と川村博忠氏によって検討が行われているので<sup>(10)</sup>、簡単な紹介にとどめたい。

宮城県図書館には、元禄12年（1699）作成の「仙台領国絵図」が三点、元禄14年（1701）作成の「仙台領国絵図」が一点所蔵されている。仙台藩は元禄12年に一旦国絵図を幕府に提出したが、幕府から国境筋に注記を書き加えるように命じられたため、「加文」を追加して再提出したのであった。したがって、



元禄12年の絵図は最初の提出絵図、元禄14年の絵図は修正して再提出した絵図の写本とみられる。この修正段階で作成された他領との境絵図も数多く残されている。

また、天保の国絵図改訂については「御国絵図記録 4巻」と「御国絵図入日記 1巻」（弘化4年（1847）の写本）が伊達文庫に残されているが、宮城県図書館所蔵の「御領分絵図」（慶応元年）は天保国絵図の写本のようなものである。

なお、伊達文庫には、寛永・寛文・延宝・貞享期の南部・秋田領との境界に関する絵図が数多く残されており、正保・元禄期の国絵図作成に直接関わらない国境争論もしばしば存在したことがうかがわれる。とりわけ、北上川河谷沿いの盆地部では激しい争論が展開した影響が後世まで残存し、近年もそれらをめぐる多面的な研究が行われている<sup>(11)</sup>。

さて、最後に福島県内に伝来する国絵図についてであるが、これまで述べてきた東北地方の他県に比べると、福島県内に存在する国絵図の調査研究はあまり進んでいない。

まず、会津藩領国絵図については、会津若松市の福島県立博物館に正保年間の写本が存在するが、現在は修復中とのことで、未見である。

また、福島県歴史資料館には、「元禄以前相馬領絵図」および「明治5年中村藩所領全図」が所蔵されており、前者は損傷が激しい部分もかなりあるが、石高と凡例の記載が省略されている以外は、村々の石高や道路、一里塚、国境の注記などは記載されていて、正保の国絵図の写本である可能性もあろうか。

それに対して、後者は俵形の中に村名が記されているのみで、石高や一里塚、注記などは省かれ、道路も主要なものしか描かれていない簡略な絵図であるが、新田や枝郷も一村として描かれているため、天保国絵図の写本の可能性はあるかもしれない。

なお、相馬藩関係の文書は、相馬市に伝来しているとのことなので、この文書中に相馬領国絵図の写本が含まれていることが想定される。

また、福島藩領・磐城藩領・棚倉藩領の国絵図は目下のところ確認されていないが、福島県歴史資料館寄託の「陸奥国信夫伊達惣検地屏風」は、寛文・延宝期に実施された検地の結果を阿武隈川の東岸と西岸をそれぞれ鳥瞰図に描き分けているとのことで、元禄国絵図に先立つ福島藩領の唯一の絵画史料として評価されよう。

さらに、須賀川市立博物館所蔵の福島県重要文化財に指定されている「白河・石川・岩瀬・田村・安積・安達六郡絵図」は寛文12年（1672）の成立とされ、正保国絵図の模写と推定されているが、おそらく前述の白河・三春・二本松の各藩の藩領絵図をあわせて清書された絵図が、元禄時と同様に正保時にも作成されたのであろう。



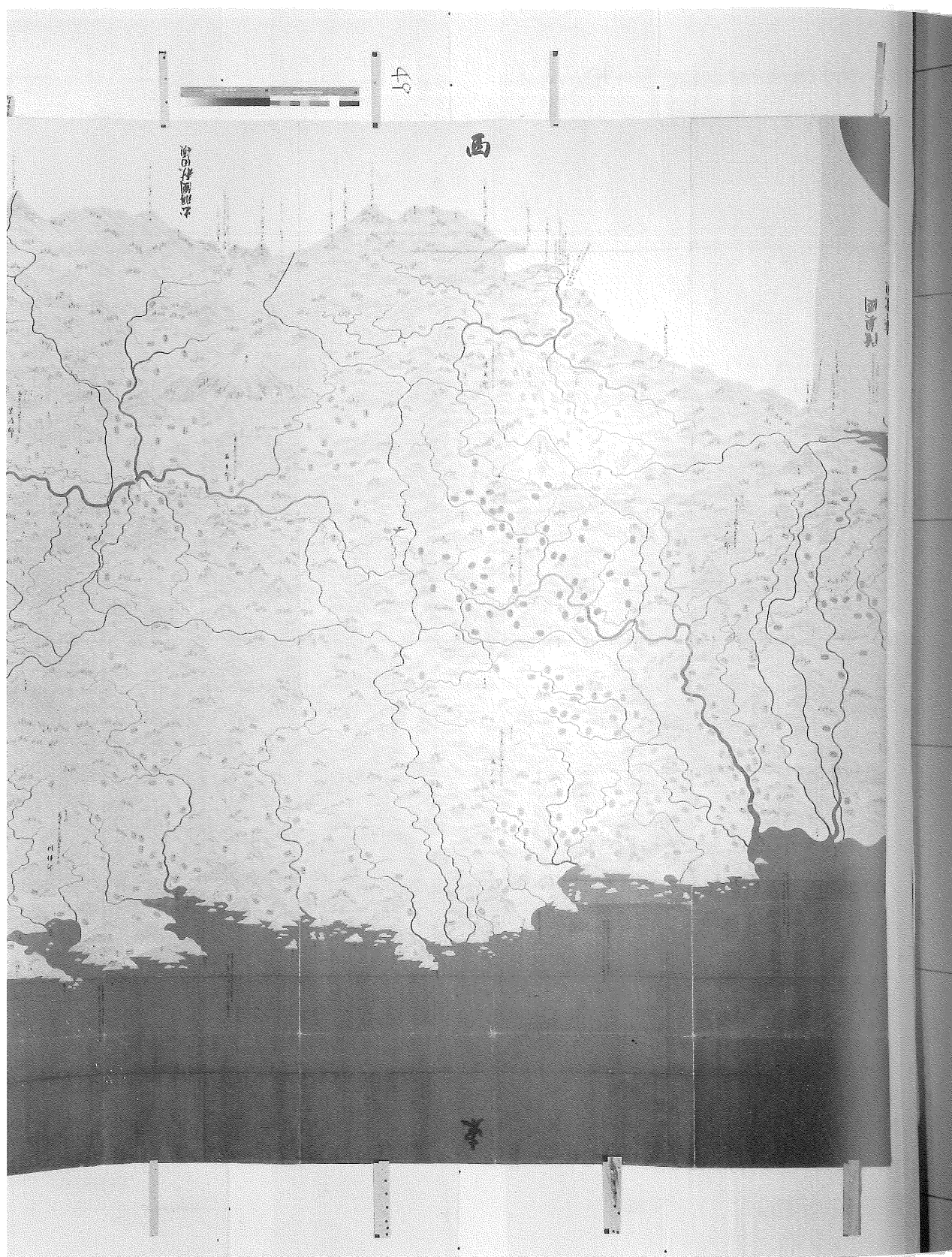


写真 3 - 2 南部領天保国絵図（国立公文書館所蔵）



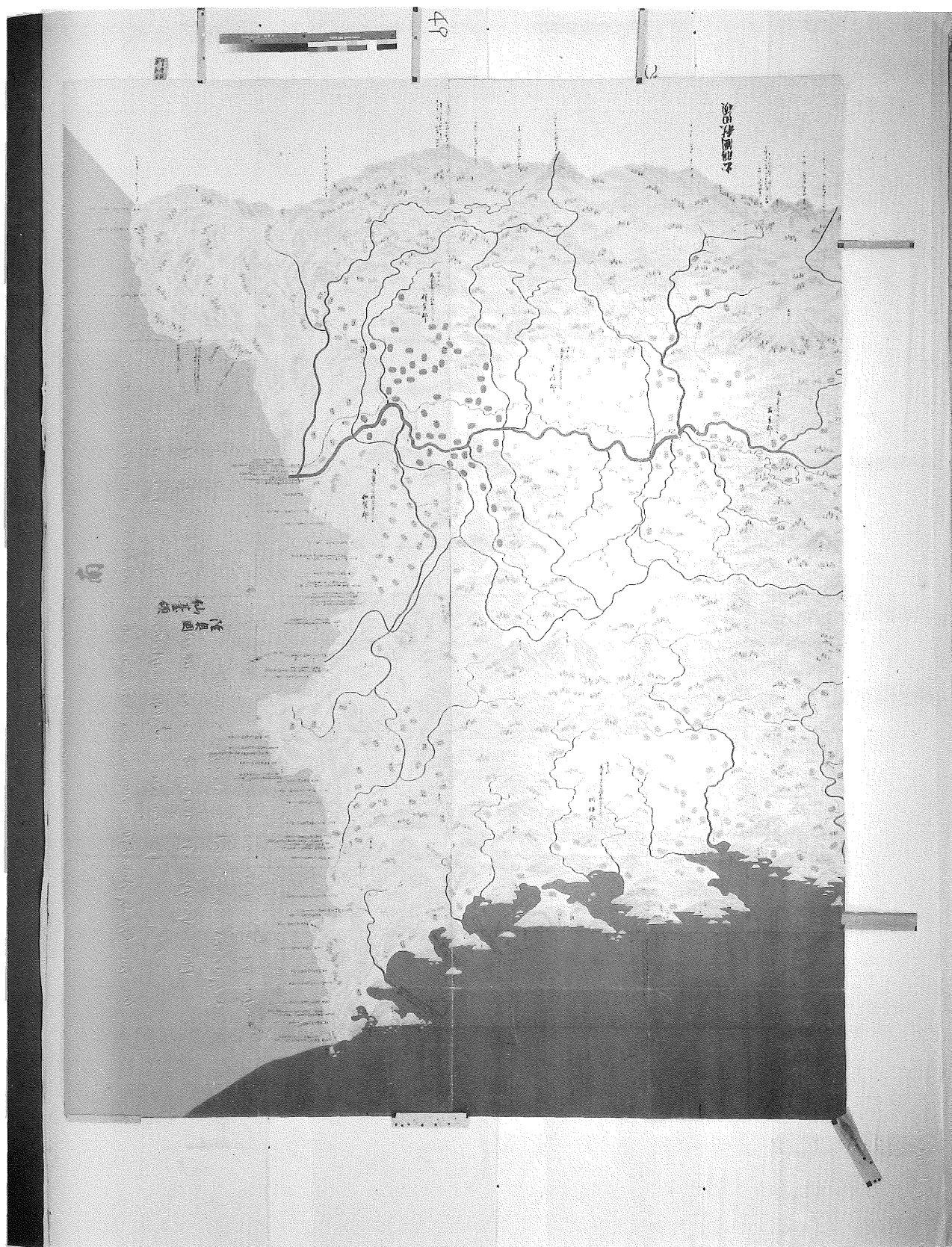


写真 3 - 3 南部領天保国絵図（国立公文書館所蔵）

### 3 国絵図にみる環境変化

成立年代の異なる国絵図を比較して、その間に生じた変化を読み取るという研究は従来も試みられてきたし、その逆に、成立年代が不明な絵図について、その表現内容を各種絵図と比較して、成立年代を推定する試みも行われてきた。

たとえば、佐藤宏一氏は各種の仙台領絵図から沼の干拓や湊の修復の年代の推定を試みているし<sup>(12)</sup>、久保純子氏は最上川の河道変遷を古地図から明らかにした<sup>(13)</sup>。

本稿では、国絵図にみる環境変化の具体的事例として、南部領国絵図に描かれた岩手山の噴火および鹿角郡の鉱山について比較検討を試みたい。

古地図を手掛かりにした火山の噴火に関する地理学的研究としては、会津磐梯山を事例とした米地文夫氏の一連の研究があげられるが<sup>(14)</sup>、盛岡市中央公民館所蔵の南部領国絵図のひとつに岩手山の火山噴火の様子を描いたものがあり、国絵図の表現としてはたいへん珍しい例といえよう（写真4）。

最近の岩手山の火山噴火に関する研究では、大規模な噴火活動が発生したのは、貞享3年（1686）と享保16-17年（1732）の活動であったとされ、貞享の噴火は山頂火口の活動であったのに対して、享保の活動は山体の東～北東部で起こった山腹噴火で、熔岩流を噴出したとされる<sup>(15)</sup>。



写真4 「南部領総絵図」（盛岡市中央公民館所蔵）にみる岩手山の噴火



写真5 「奥州之内南部領惣絵図」（盛岡市中央公民館所蔵）

一方、国絵図に描かれた岩手山の噴火は山頂付近の南西部から噴煙が立ち昇る表現になっているため、享保の活動ではなく、貞享の活動が記録されたものと解される。この国絵図は、それ以外の国絵図とは若干表現内容を異にするが、貞享の噴火以降のほど遠からぬ時期に作成された可能性が大きい。

それに対して、正保の国絵図の写本と考えられる三点の絵図には、この岩手山の噴火については全く描かれていない。したがって、この岩手山の噴火を描いた国絵図は、元禄国絵図の写本である可能性も考えられよう（この絵図には村高も郡ごとの石高も全く記入されていないので、石高からの年代比定は困難である）。

なお、天保の南部領国絵図（国立公文書館所蔵）にも、山頂から噴煙をあげる岩手山の姿が描かれている（前掲写真3-2）。天保の国絵図は元禄国絵図の写本に訂正を施した程度のものであったため、元禄国絵図の岩手山の表現が踏襲されたのかもしれない。

次いで、鹿角郡の鉾山については、南部領国絵図に「白根金山」と「西道金山」の記載がみられるが、三点の絵図がそれぞれ独自の表現をとっているため、



この点について検討したい。

白根・西道の両金山は、慶長期に発見され、寛永期に最盛期を迎え、その後は衰退に向かって寛文期には銅山に変わったという<sup>(16)</sup>。したがって、国絵図作成との関連からすれば、正保の国絵図作成時には金山としての意義は存在したが、元禄の国絵図作成時には既に金山としての存在価値は消滅していたといえよう。

さて、筆者が実見した「奥州之内南部領惣絵図」（目録特28.8-1）、「南部領惣絵図」（特28.8-2）、「南部領内総絵図」（特28.8-3）、「南部領総絵図」（特28.8-4）、「領内図」（特28.8-6）における、これらの金山の表現を比較検討すると、まず「奥州之内南部領惣絵図」では「白根山」「西道山」と記され、他の山々と同じ表現で描かれている（写真5）。

それに対して、「南部領惣絵図」では「白根金山」「西道金山」と明記され、しかも山頂付近に小さな赤い丸がたくさん描かれ、いかにも採掘が盛んな様子を表現しているとみられる（写真6）。「南部領内総絵図」および「南部領総絵図」の場合は「白根金山」「西道金山」の付箋のみで、表現そのものは他の山々と変わらないが、「領内図」は「白根金山」「西道金山」の付箋があり、山頂付近は黄色く描かれ、他の山々と区別して表現されている（写真7）。

この「領内図」の裏には「正保二年御絵図」と記され、その上から「此絵図ハ正保年中公儀江指上扣」と記された貼り紙が存在し、正保国絵図の控絵図であることが確認される。「南部領惣絵図」も絵図表現は「領内図」に類似しており、同じ系統の控絵図かと思われる。

一方、「奥州之内南部領惣絵図」は表現がかなり異なっており、「領内図」とは別系統の絵図と考えるべきであろう。白根山・西道山を金山として表現していないことから、正保の国絵図の系統であるとしても、かなり時間が経過してから写された可能性が大きく、元禄の国絵図作成段階で作成された正保国絵図の写本かもしれない。

すなわち、正保の時点で作成された国絵図には、当時盛んに採掘が行われていた金山が特別視されて表現されたが、元禄の時点ではこれらの金山は既に衰退していたため、他の山々と区別して描かれることはなかったと理解されよう。天保の国絵図（国立公文書館所蔵）でも、同様にこれらの金山は特に区別して描かれてはいない（前掲写真3-2）。

なお、「南部領内総絵図」および「南部領総絵図」は大きさが他の三点の一里六寸の縮尺の国絵図よりはかなり小さく、おそらくその作成時期も若干遅れるものと想定される。

以上のように、南部領国絵図における岩手山と鹿角郡の金山の表現は、正保・元禄・天保の各国絵図でかなり異なることが確認され、国絵図はこれらの環境変化をある程度描き分けていることが明らかになった。

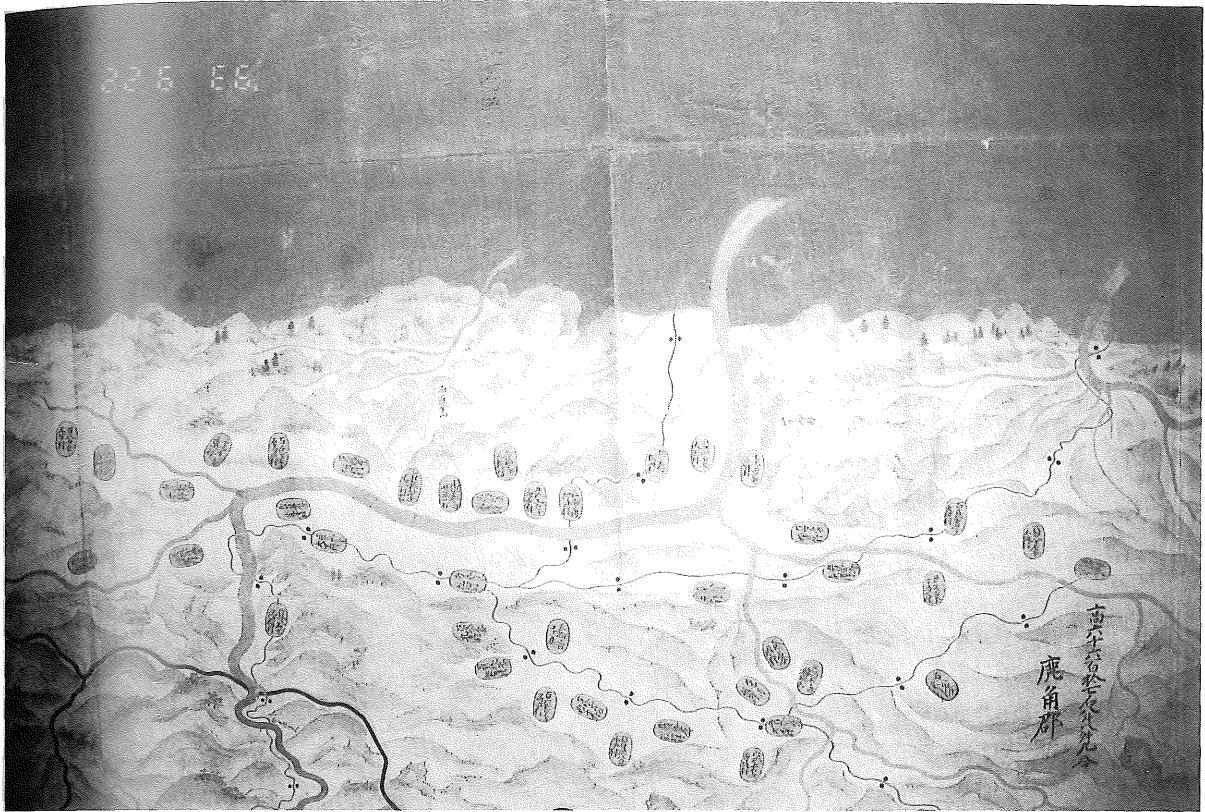


写真6 「南部領惣絵図」 (盛岡市中央公民館所蔵)



写真7 「領内図」 (盛岡市中央公民館所蔵)

#### 4 おわりに

以上、この三年間の調査から明らかになった東北地方における国絵図の所在状況と、それらの国絵図にみる環境変化の事例を紹介した。

所在状況については、今後の国絵図研究の進展につれて、新発見の絵図が紹介される可能性は大きく、また、今回の調査に際しても未見の国絵図がまだまだ残存しているため、さらに継続して調査研究を進めていきたい。

ただ、天保国絵図については、国立公文書館の閲覧・公開体制が十分とはいいがたいため、今後は研究者間で、国立公文書館所蔵国絵図の利用方法を再検討すべき時期であろう。

たとえば、最近、米沢市所蔵の上杉本洛中洛外図屏風の精巧なレプリカが完成したが、重要文化財指定の国絵図についても、このような試みが実現されるべく要請することも必要であろうし、それ以外の所蔵機関においても、巨大な国絵図の閲覧体制を確保してもらうべく要請することも国絵図研究の今後の進展のためには不可欠であろう。

また、昨秋、京都の醍醐三宝院で開催された山岳修験学会大会では、パソコンに入力した醍醐寺所蔵の絵画・仏像類の画像データベースが紹介されていたが、国絵図を含めた今後の絵画史料研究の前進のためには、このようなデータベース化を進めていくことも必要となろう。

[付記] 国絵図の現地調査に際しては、秋田県立秋田図書館の山中良二郎先生、致道博物館の犬塚幹士先生、青森県立郷土館の瀧本壽史先生、盛岡市中央公民館の大沼信忠先生、岩手大学の米地文夫・菅野文夫先生、福島県歴史資料館の藤田定興先生をはじめとして、所蔵先の多くの方々にお世話になりましたことを厚くお礼申し上げます。

なお、出羽国国絵図の調査は、葛川絵図研究会の共同調査として実施したものであり、国絵図の調査研究に際して、多くの刺激を与えていただいた葛川絵図研究会会員諸氏に感謝いたします。

#### 注

- (1) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院、1984年 2月。  
川村博忠『国絵図』吉川弘文館、1990年12月。  
川村博忠『近世絵図と測量術』古今書院、1992年 4月。  
矢守一彦『古地図への旅』朝日新聞社、1992年 7月。  
土田直鎮（研究代表者）『現存古地図の歴史地理学的研究』東京大学史料編纂所、昭和55年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書。
- (2) たとえば国絵図を含む絵図展としては、福井県立博物館で1989年4～6月に開かれた「描かれた越前若狭」展、桑名市博物館で1990年11～12月に開かれた「古地図」展、熊本県立美術館で1991年 5月に開かれた「肥後

絵図」展、群馬県立文書館で1991年10～11月に開かれた「上野国の国絵図」展、土浦市立博物館で1992年1～3月に開かれた「絵図の世界」展、高知県立歴史民俗資料館で1993年4～5月に開かれた「土佐古絵図」展などがあげられ、東北地方においても東北歴史資料館で1991年11月～1992年4月に「仙台藩の絵図」展、福島文化センター歴史資料館で1992年10～12月に「古文書と古絵図にみる近世の山と境界」展が開催され、1994年春には岩手県立博物館で「図絵にみる岩手」展が、1994年6月から山形県立博物館で「ザ・絵図－近世の山形を読む」展が開催される予定である。また、国絵図を活用した地方史類としては、『福井県史 資料編16上絵図・地図』1990年2月、『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』1989年3月、『小浜市史 絵図地図編』1993年6月、『藤井寺市史第十卷史料編八・上』1991年3月、『四日市市史 第六巻 史料編 絵図』1992年、『新熊本市史 別編 第一巻 絵図・地図』1993年、などをあげることができる。

個別の国絵図関係の研究論文としては、羽賀與七郎「元禄国絵図に関する新資料について－弘前藩の場合」弘前大学国史研究2、1956年12月、福井敏隆「慶安二年二月成立の「津軽領分大道小道磯部路并船路之帳」」弘前大学国史研究75、1983年3月、半田和彦「元禄国絵図製作覚書」秋田県立博物館研究報告6、1981年3月、松淵真洲雄「秋田藩の国絵図と郷帳」『秋田地方史の展開』みしま書房、1991年2月、佐藤宏一「仙台領国絵図覚書」東北歴史資料館研究紀要3、1977年3月、阿部俊夫「会津藩における元禄国絵図の作成と会津布引山争論」福島県歴史資料館研究紀要15、1993年3月、斉藤明子「元禄国絵図の記載内容について」双文6、1989年、干川明子「天保上野国絵図控図の記載内容について」双文8、1991年、斎藤司「元禄期、上武国境論の展開過程について」群馬歴史民俗13、1992年4月、海道静香「慶長越前国絵図をめぐる」自然と社会57、1991年、吉田敏弘「元禄伊勢国絵図の作成過程」四日市市史研究5、1992年、松岡浩一「元禄国絵図系統の美濃国図について」岐阜史学85、1992年、坂本敬司「鳥取藩の海岸絵図」鳥取県立博物館研究報告29、1992年、大脇保彦「土佐国絵図について－元禄国絵図を中心とした若干の検討」高知大学学術研究報告（人文科学）40、1991年、渡部淳「豊後国慶長御前帳・国絵図関連史料をめぐる」海南史学31、1993年8月、上原秀明「慶長肥後国絵図の記載内容について」熊本短大論集43-1、1992年10月、上原秀明「慶長肥後国絵図の歴史地理学的研究」熊本短大論集43-2、1993年3月、などがあげられ、近年の歴史学からの研究動向については杉本史子「国絵図研究の課題と展望」日本歴史529、1992年6月、に詳しい。

(3) 浅倉有子「津軽藩の郷帳について」弘前大学国史研究73・74、1982年。

(4) 特別展「高照神社宝物展」図録、青森県立郷土館、1992年6月。

- (5) 吉田義昭編『南部盛岡藩領内絵図』郷土史叢刊行会、1976年 9月。なお、この絵図は、領内絵図と領内33の行政区「通図」の縮図から成り、盛岡藩士長沢盛至の編によって、嘉永7年（1854）に刊行された。
- (6) 盛岡市中央公民館編『盛岡藩雑書 第一巻』盛岡市教育委員会、1986年。
- (7) 盛岡市中央公民館編『盛岡藩雑書 第六巻』盛岡市教育委員会、1992年。
- (8) 前掲注（1）参照。
- (9) 前掲注（7）参照。
- (10) 前掲注（1）および注（2）参照。
- (11) 杉浦直「旧藩境地域における空間組織と領域性－北上市鬼柳・相去地区の調査から－」人文地理43-5、1991年10月。  
鯨井千佐登「郡境＝藩境（南部・仙台）の不可侵性－「白狐・慈覚大師」伝承・「浅野長政」伝承・「行逢裁面」－」宮城工業高等専門学校研究紀要28、1992年 2月。
- (12) 前掲注（2）参照。
- (13) 久保純子「庄内平野の地形分類図にあらわれた活褶曲」東北地理43-3、1991年 8月。
- (14) 米地文夫「絵画資料の分析による小磐梯山山頂の旧形と1888年噴火の再検討」東北地理41-3、1989年11月、同「日本初の災害地形図「磐梯山之図」について」地図30-3、1992年 9月。今回の南部領国絵図調査に際しても、米地文夫・菅野文夫先生から多くの御教示をいただいた。
- (15) 細井計・伊藤順一・高橋清明「岩手火山の享保16－17（1732）年における噴火活動に関する新史料の発見とその意義－盛岡藩「雑書」より－」岩手大学教育学部研究年報53-1、1993年10月。
- (16) 今村義孝監修『日本歴史地名大系 5 秋田県の地名』平凡社、1980年。